

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2018.12



創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しました北上した、すべての未開なものと同化してきただ大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ氣持である。

源泉的・精神的・本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地 中 海

一一〇一八年十一月号（通巻七二七号）

■歌壇月旦

ニューウェーブ三〇年

玉井綾子

◇今月の二十首詠……うるゝ雲

本田昌子 2

■シルクロード・カフェ

（責任編集）木村文子 52

もとむらしげと・神田鈴子

■作品[A]

草刈十郎・國井節子他 4

嘉穂子・庄野ひろ子

海保奈良繁他 20

酒井 牧・永田進一

笠井秀子他 54

光広祥子

神田道子他 68

オリーブ集・三浦好博

遠間 淑他 82

久我田鶴子

養学登志子・若松喜子他 44

宮本靖彦

■オリーブ集

（編集部）

◇今月の二人

中島央子

芦田房子・神戸良三 16

三浦好博

《特集》滝田靖子 あっラカルト 37

（凌霜グループ）

短歌 黒い服

田土成彦 15

作家論 憧れの江分利満氏 50

杉原令子 19

エッセイ 戦艦山城を知っていますか

久我田鶴子 18

◇今月の二人・作品評

107 106 105 104 67

◇冬のアソソロジー 〈雪〉 色井静代 50

107 106 105 104 67

香川進の生きものの歌 2

田土成彦 15

私と短歌との出会い (196)

杉原令子 19

クリップ……108 神田通信……表3

107 106 105 104 67

古典基礎語、その他。

107 106 105 104 67

◆第一歌集の頃 地中海叢書一覧

107 106 105 104 67

（表紙デザイナ）Tazuko Kuga

うろこ雲

本田 昌子

昭和十一年生まれ。
昭和四十五年入会。福島支社所属。
著書に「中学生給食日記」(記憶の
窓から)、「愛の旋律(うたのアルバ
ム)」がある。

したたるような優しさも欲し働き方改革法案国会通りぬ

秋の陽に透きて見えくる勤め來し昭和の職場の景のひとつま

色褪せしスーツの胸の染みふたつチョークの粉のような色もつ

生徒らの手本であれとの朝礼訓示その重たさに息深く吸う

教頭と主任と連なる三人の会話の細きがどこか秘密めぐ

完璧な管理職との面見せて非を突く声のオクターブ高し

女というどうにもならぬ理由もて女性を追い詰めし校内人事

今はもうなんにもいらない手廻しの蓄音機に聴くショパン・夜想曲

「サスケネーぞ」夫の方言にくるまれて強張りし面のゆるり和らぐ

産休の手続き終りしわれの背に「女は得だ」の言葉刺さりぬ

高熱の眼うつろにしがみつく吾子を抱きしめるのみのこの母

髪赤くスカート長く群れ歩く少女らの爪の黒きマニキュア

「カーラン」と舌足らずに呼ぶを内に置き授業に向かう階昇りゆく

丸刈りは「かっこわりー」と抵抗の大聲届かぬ教師の現場

違反生徒の髪ぱっさりと切れますか噛み合わぬ会議の今日も長びく

携帶のラジオに流るるトスカのアリア灼けつくようにわが脈を打つ

金木犀の小花忍ばする子らへの手紙ポストに運びしもこの頃のこと

がむしゃらな共働きの姿にも似ているように咲く赤のまんま

白萩を包める夕陽のぬくもりに触れて杖の身の歩幅を合わせ

今はただこうしていたいというさまの九月終りの空のうろこ雲

作品 A

柏原宗一 暗き午前三時

・羊

山の揺れ、午前三時のことなればにはかには思ひ出すことかたし
暗き闇夜の午前三時、明くれば庭の景色が変はる
揺れやまずただ揺れてゐる午前三時明くれば裏山の景色が変はつた
揺れてゐるただ揺れてゐる午前三時ねむりのごとくゆきすきにけり
関西の多くがござりて大あれせり何の手だてかわからぬものを
日本海にすで台風はすぎてゆく何の手だてか風の力は
日本海の海をのぞめばとどろけり嵐のありと風のうはさは

草刈十郎 梅酒

・世

次つぎに庭に咲きたる紫陽花の色は足し算七変化なり
ベランダの妻の吊るしし風鈴に甦る思ひ次つぎにあり
虫とりの子ら振りまはす網の中入るは夏の風ばかりなり
じりじりと照る太陽にひと雨の欲しきを言へぬ災害のあと
炎天下の人みな罪を負ふごとく肩を落として喘ぎつつゆく
年月のとろりと甘き梅酒なりわれらわいわい時を忘れて
連日の猛暑続々に明日もまた猛暑を告ぐる予報士にくらし

國井節子 鉤穴

・春

人気なき古道の奥の古民家の白きのれんがおいでと招く
山寺の古き桜の花の下みそなめ地蔵のほほ笑みに会ふ
重ね来し永き年月省りみて至らぬわれには過ぎたる夫よ
歯を見せし亡夫の写し絵摩訶ふしき日の経るにつれ若く見えたり
亡き人の魂のごと咲きづく濃きむらさきのつゆ草の花
針穴に糸がすんなり通りたり願ひかなひてひとまづ安堵す
まつ新なレンズに替へしわれの眼に痛きまで白しピョンチャンの雪

菊岡栄子 難病P.S.P.

・連

香道の師なる好胤夫人のもと一番弟子をつとめしものを
氣の進まぬショートステイに出掛けんか良き首尾願う夫の入院
北海道へ息子の家族と旅をする我が車椅子を孫押しくる
正月料理今年は家で作るとう味にうるさい息子や孫ら
P.S.P.とう難病に罹りたり新薬の誕生一途に望む
ベッドの柵持つ手放さんと思えども意思に逆らい外れぬこの手
週により三泊四日の日がありて居眠ることの多くなりたり

菊地栄子 背菜

・湾

語らうは「敦盛最期」諳する口説にあらず聴きのがす惜し
ちばはぐな会話交わして去りゆける友を見送る立ち尽くしつ
指先が滑つてうまく捲かれないこのもどかしさがわれを僻めぬ
明るきをあゆめと叱咤の声返る恐れず歩む齡となりぬ
わが声の通じざりしに示す地図身振り大きく指差したまう
剪定の枝を揃えて束ねゆく定めなき時間何かいとしい
みずみずし蕪の青菜もソテーにす容易く瘦せぬ思いかこちて

木 村 文 子 雀

・羊

小 西 美 智 子 橋

・大

ひと雨が作りし浅い水たまり雀が数羽水を浴びいる
いきいくために生きゆく清しさに心の凝りがほぐれゆくなり

人のそばで生きる知恵もつ雀たち寿命一年に胸を衝かれぬ
コンクリをまとった町は生きにくく雀は大きく数を減らす、と
首をのべあたり見回す雀たちを見守る我をみつめる誰か

雀たち飛びたちてのちの明るさのなかにてひとつ大きく息つく
一群れが飛び去りてすぐまた群れがエンジンをかけず我は待ちおり

小 泉 泰 清

秋めく

・う

電気料惜しまずクーラー点けよとか請求票に数字色濃し

妻とわれ共に新米の袋持ち娘へ送るべく崩れて淋し

湯氣香る新米ご飯に生玉子落し黄味栄ゆ今宵満月

歌料を求めて夕べ散歩する虫の鳴く音の荒れ田に染みる

猫ちやらし白粉花の漣れ合ひ拘置所に沿ふ道辺に搖らぐ

煉瓦状の壁赤く映え沈む日を抱きて拘置所マンションの如

台風の塩害により菩提寺の萩は咲かずに枝垂れ秋づく

河 野 繁 子 便 り

・雁

近 藤 栄 昭

夏の思い出

・福

鐘の音近くに聞こえ阿波踊りの練習なりと夏の便りは

冬は夕夏は明け方オリオンの位置を確かめ過ぎし歳月

うた読みはいいな成りしは自分がものと遠き日の言また甦る

人と獸ともに住む町夏椿すがすが咲けど穏しくあらず

植えぬのに勝手に育ち独活の花蜂を集めて小春楽しむ

水害に遭わず暑いと萎える日々手助けならぬ被災地おもう

哀しみを神に預けし今朝の涼キツネノカミソリさ庭に聞く

夜半めざめ渴ける口にふふむとき「水を」と呑きし被爆者おもう
夕餉の菜買に一人で渡る橋から紅葉が夕つ日に照る

花を待つ心ほのぼの抱きつつ橋わたりゆく駅までの道

ほの白くほころび初めたる一三輪ことしのさくらにあいてやすらぐ

この春も香に誘われてとびきたる太れる虹がさつきに遊ぶ

心音の高きを聴きつつものを読むかつてなかりし身内のうごき

グループの沙羅の名前のなつかしく沙羅の花咲く道あゆみゆく

小 林 能 子

日々薬

・羊

なげなく見てをれば雪外灯の光をめがけ降りつの雪
真夜中の羞しき明かり寝返りもナースの声に勵まされつ

夢のことき歌集上梓の相成れば日日薬もゆるやかに効く

盆棚に寒川の梨 松田の酒 友の便りに「歌集も添へて」

五十九回忌も昨日のつづき明日へと「遠忌」などとは言って下さるな

ひさびさのキッチンに立つ嬉しさよ銀色の煮干ひと握り煎る

かさね置き氣ままに選ぶ一冊は年の余りの幸せとして

掬い飲む岩間に滴る「延命の水」体うるおす山の賜物

霧氷降らす寒氣団覆う黒檜山脚から上は真綿の世界

求めればあるもの全て得られそう株名の頂果てなしのむこう

困ったな声に驚く痺る足になかなか見えぬ次の道標

出るものと汗と鼻水ふり散らす安達太良の鬼トラン走者は

木々の下テント小さく布薄き彩る繭の鼓動きこえる

うす霞む尾瀬の木道人の列「夏の思い出」たなびいている

近藤芳仙

ミケランジェロ

・信

ミケランジェロ上野の森へ來ると聞けば尋めゆく「理想の身体」「洗礼者ヨハネの像」の瞳はも遠く見据ゑてうつくしくすむ未完とふ思ひも深く残さる。ダヴィテ・アボロは球体をふむ大理石にミケランジェロの彫り出す「理想の身体」つひに見えずフィレンツェのオレンジ色のあたかさミケランジェロの故郷にたつミラノにはミケランジェロのピエタ像これも未完に荒きノミ痕ミケランジェロ八十八歳の未完の像追へど終りのなき旅なりや

坂上直美 花

・天

越してより気がつかざりし桜木を今日見つけたり春待ち兼ねつ線路脇テイジー群れ咲く小さき駅今は無人の駅でありしよヒメジョオン・カラスノエンドウ春の野のままで遊びのおかずでありし花の名を一つおぼえし春の旅木香薔薇のあふるる黄のいろ青孔雀頭を擧げて見露かす百日紅の白を従えあの白き花は何ぞや冬の日の通りすがりの古き家に咲くうかうかと一生過ぎゆくたまゆらの桜の春に酔い痴れるうち

坂出裕子 オリオン

・洛

真つ黒の日焼け歎けば焼けるほど歩ける幸と子にさとさるる元栓閉めてオリオン眺むるを楽しみとしてひと日を終るこんな花みたことないよきいいねと見上げてをりぬ鳥の子供が山ぎはの空のくれなる少しつとけてゆくなりたそがれは来て告ぐることあらぬこころの炎とも間にしづかに沈む紅葉はうちの梅送つてといふ子のために今年も漬けむくれなるの実をいら立てるこころなりしが子と孫の電話のあとを不思議不可思議

佐久間晟

日乗

・湾

花は咲く誰に見せんといふこともなくサルビア朱し八月の丘に島啼けばそよぐ木陰の清々しさに未だも探す美しきもの鳥族は何の宴かそれぞれに黒衣をまとい森陰に啼く何も無いわが歌作りの生涯に妻も寂しき苦界の一世人か火のごとき頭をもたげ時折は一人への愛、傍らの人師の声の「おーい佐久間」が聞こえ来る何か言い忘れし事のあるらしここに居る佐久間晟とは誰なのかそれを求めて今日も生きてる

佐久間すゑ子 花と花

・湾

もう何も要らなくなつた歳、今朝もまた庭の草草の花を見ているこぶしの花の下、だまつたまま犬と二人で見上げているこぶしの花は美しい。空を背にして春を謡歌している香川スミレは今年も咲きました。先生がまだ健在のように京鹿の子の花が咲きました。愛しいお方の訪れるように京鹿の子の花。気難しくて人見知り。でも少し寂しそう京鹿の子が花が揺れます。今去ったお人の手風のよう

佐藤道子 老い

・甲

みぞれ降る寒き朝をアーモンド小さな真珠の花芽かかぐる三寒四温死語となりしや冬将軍寒寒寒鑑鳴らし過ぐ物なべて心があるや寒き夜をトレボカ独りトイレ暖む生れてより九十年は夢の間にされど寒さのこの冬長し子に頼り子を愁ひつつ過ごす冬寒さの中をかがまりて生くぼけ防止と言はれて弱し子が勧むサプリ一粒口に含みぬ朝起きて動けることの幸せをしみじみ思ふかじかみながら

椎名恒治 七首

・橋

閑根榮子 お守り

・埼

窓の下表通りの並木より朝明けより蟬の声こぞり湧く

降り立ちて歩道の片隅杖突きでしばらく歩みすぐ戻りくる

昨日は街樹に鳴きてるたりし蟬なりや死骸一つころがりゆきぬ

台風の高湧襲ひたりしかのホテル曾て泊りし夏ありき

夜半の海の上あかあかと残れる大き月を惜しみゆるたりき

静岡県熱海市の海水浴場は九十九里浜の砂を運びつといふ

ここ海岸通りにはわがふるさと九十九里浜の砂が飛ぶ

鈴木結志

亡妻の玉章

・福

もしかしておもかげびとの来るような藍色深む桔梗の花

追憶をひき出すほどや水葱の花滴に冴ゆるふかきむらさき

うたなれば一気呵成は夢にして紛ぐ表現魂込めて練る

たぎちはしぶき虹織るせせらぎの君の声かと紛う水音

盈盈の水に映りて天の川亡妻の玉章つらね明るむ

在りし日の妻の思いを通わせる初咲き藍の朝顔の花

世木田照比古

豪雨

・茜

青き野は師の生誕地数多なる書作収めし記念館聳ゆ

偲びつつ見る師の書業に熱溢れわれ範とせんすべてを賭けて

三月の日ざしみるに照りくれば意欲湧ききて大筆を持つ

墨の香の充つる練成会場に若きが連ぶ筆の音聞こゆ

未曾有なる降雨統きて故郷の団地の一つが土砂に埋まりぬ

道路網すたずたとなり術もなし焦燥の中に今日も暮れたり

床下の泥搔く若きボランティアその只管に頭を下げる

石仏が流星を呑みし伝説を思い出しつつ眠りに入る

急ぎ飲みコーヒー碗を置きて行く夫に畳碁打つ待ち人のいて

取り残す柿は子守り柿という日溜りにしてたむろする子等

小夜更けの窓ゆ仰けば雪残る甍の上の月蝕あかく

先生も団子を召すと笑い合う梅ヶ丘に梅見をしたる日を恋つ

足腰の神様は高麗の聖夫院草履のお守りを求めしもはるか

みはるかす湖なりし利根川の決壊の記憶は十歳のとき

閑根和美

羅漢果

・埼

雪の降る前にと乞われ訪えざりし越中岩瀬に君ひとり病む

まきもどす術あらば君すこやけきいまひとたびの月日のあれな

花の香につつまれ眠る至福あり必ず醒むるものなればこれ

英國は雪降りやまず動画より息子夫婦の息しろくたつ

還暦をまたず召されし郭秀娟かたことの日本語笑顔のうかぶ

身を案じ送りくれにし羅漢果のまるき茶色がころがり出でつ

死は決して終わりにあらず身はいつも見える者に支えられて

高尾恭子

裸足のステップ

・大

右肩をいからせて子は発ちゆけり八重の桜のほわほわとして

ちっぽけな齟齬に苛つくちっぽけな五体を露天の朝湯にさらす

口だけになつても母は毒を吐くカーネーションの一輪赤し

愚痴愚痴といや佛とたらちねの母は方丈の極楽にいる

還るべき海をさがせば二杯目の泡盛すむ玄冬小説

沖縄は梅雨明けとかや爪あかく染めて裸足のステップを踏む

海鳥のひくく飛ぶ空はてしまく昨夜の美ら島に大人逝きぬ

高津砂千子

枯れ草

・風

竹下妙子 想ひ

・霧

・霧

ひとことに言うはたやすきことなれど枯れ草さえも一色ならず
おお寒い急ぎ手ぶくろ編みあげな雪よしばらく待つておくれ
着氷のせつな飛び散る氷のつぶてあざやかなる力をメラは捉う
SEIMEIの衣裳作りし人もまた氷上の舞い胸あつく見ん
かすかにも流れる読経をたよりとし手さぐりにゆく洞窟めぐり
朝五時の中空占むるオリオンの星のきらめきたなそこに受く
清麻呂の危機を救いしイノシシは狛猪となりて社に

高橋和代

大和言葉

・桃

ふと目覚め庭の切り取り見る空 明星 三日月寒ざむとあり
探るがの雨水の流れ岐れたり われは低きを選らず来りし
自分が眼にて見たる思ひ表はせとの教へいつまで守り詠めるや
歌材にと県境の峯の縦走とふ大胆無謀なる事もせし
「みそひともじ」に係る日々に深みゆく「大和言葉」のそのゆかしさに
病みこもる身には新たに目に止まるもの無しまして聞く事も無し
病み進むのはいつまでぞ哀れなる短歌もはや詠みたく無くも

滝田靖子

手の平

・新

田土成彦

風にあうため

・宙

ドス黒き新燃岳の噴煙柱荒ぶるままに人智すべなし
常に見る新燃岳は氣高くて切なきまでに終結祈る
菜の花の咲きし畑なかの踏切を一輛電車春しぐれゆく
泰山木の空に伸びたる尖端に花開きゆくらふたけき白
椿の葉濡らせるのみに過ぎゆける時雨のいろの寂しかりけり
凍つる日の花胡椒の真紅の実冬陽浴びしが思ひは知らず
冬水はひそけかりけりゆつたりと川の底ひを光りつつゆく

田土成彦

薺

・宙

弧を描く薺のつばさに昼たけて岬の春のうしほかがよふ
雲のさまつぶさに映す水面をときに乱して鴨の飛び發つ
投げ込める石が一つ跳ね二つ跳ね落暉の湖のかがよひに消ゆ
堰堤のさくらは笛もたげぞりきさらざ尽の伸ぶる日ざしに
アスファルトを時雨が濡らしてゆく時間物語りめく事にあらねど
枯れ草の四、五本風に揺るるときささやかにわがかなしみのわく
ランタンを舳先に掲げこき出せば舟は宇宙の間行くことし

田土成彦

風にあうため

・宙

見つめ合ふこの瞬間を水らせてしまつておかう君が笑ふまで
本当はどうなのだらう重ねたる君の手のひら少し冷たい
重ね合ふ手のひら少し冷たくて永遠のやうなこの一瞬の
心だけがひとり歩きする不器用なため息が闇を深くしたから
生きゆかむ決意も覺悟もないわれの息をしてゐるだけの毎日
ネガティブな言葉に綴る日常にやはらかな君の声が射し込む
顔を上げて桜を見よううつむいて過ごす季節はもう終はつたのだ

玉井綾子 始点

・羊

中島義雄

菜の花慕情

・岡

蝶の来ぬ中央通りの花壇には担当企業があり花絶えず
甘夏のしぶきは音も香も強く帰らぬ君の席にまで飛ぶ
玄関を開け放しの子の父はペットボトルをまた出しつばなし
公園の秋の照度を増すためにイチヨウは日差しの保護色となる
平成の小一に「死」は瞬間のもので散文的な言葉
己が手に戻りし扇子は一度と広げず揚げずしまい込みたり
自動ドア出でて路上で見上ぐれば雪の始点は日本橋タワー

虎谷信子 生命

・伴

死刑者の写真 ずらりと載る新聞。そして坂本さん一家のが。ああ
人間が人間を さばかねばならぬ きびしさよ。今度は女性の法相
つぱくらめ軒ばに巣づくりせし頃ひ、小さき生命のにぎにぎしけれ
八朔を祝ぐ習慣のすたれしも。京の花街にのこるを 知れり
うつば公園バラの盛りを訪ひゆけば 「梶井」の石碑ひとあたりたり
歳時記を 蝸牛考とぞ教はりし。杳き杳き日のこと
「蝸牛考再版出でて夏隣る」師の句ふとも思ひ出しうる

中島央子 杠目

・森

唐突にフロントガラスに貼りつき蛙のみどり時のみどり
海猫のきしみ鳴く声さわがしく島の土にも島の空にも
釣人は無頓着な高いびき鯨をあげし夢なぞ見んか
寒暖の差におもはずつまづきて今日の買ひ物先のはしする
ひとすぢの時の零のしたたりか越の地酒がこつくりにほふ
賜はりし大吟醸の桐の箱美しき征目に捨てられもせず
シチリア産グリンオリーブの塩漬をなくなる頃に礼状を書く

萩葉子 泉ヶ岳

・銀

日本の百岳山のひとつ山泉ヶ岳に登りし日はるか
バスがきて並んだ列が動きだし大きな息吐く一番寒い日
茉莉花の固い花芽を確かめつ安堵している如月末日
列島の海岸線に原発の所在地の丸印意外に多い
バス通りさて通れば裏の道遠目に白い樹の花が咲く
青織部の四方鉢皿みてし真夏日に薄茶点てたり織部の平茶碗
野の友になるかも知れぬ長茶筅 茶筅置きなる付属もありて

芽吹きにはまだ遠けれど枝枝の向こうの空は淡き春色
ひさびさに訪うふるさとの渡良瀬の土手は一面菜の花の色
冷えしるき夕暮れ時の桜花何をか隠しさゆらぎもせず
風にゆるるいちょうの若菜女童の口元おさえる両の手に似て
海へ向く傾りに点点いそぎくの風吹けば風に雨ふれば雨に
そういうばいつも下を向いていた星の光を見ることもなく
冷やかに満月牙ゆる冬の空明日も良き日と言われたようだ

永塚節子 好日

・銀

白子れい

疏水辺の径

・洛

浜本芙美

首飾り

・夢

・夢

野おもてはうつすらと霜水面には水蒸氣たつ今朝の散歩路
 苦むせる幹もつ桜の枝先のほのあかるめり力漲る
 あかあかと小徑いろどる花しへを踏みまどいゆく鶯まつみち
 昨夜の雨の名残り葉先に光らせて疏水辺の徑みどりをふかむ
 若みどり濃みどりぐいぐい迫りきてこころも身体もみどりひといろ
 前よぎるたび花の名を声に出し記憶のとびら叩きつつゆく
 努むるも一步前進二歩後退あせらず努めん終いの日までを

ばばりようこ

夢食む発作

・鹿

少女期より夢食む発作癒えやらず長じてとうとう持病となりぬ
 夢追うが私たらしむるとうべないて水を放てばちさき虹生るる
 ゆめはゆめ実現せぬが夢なりとおおらかなりて今に至りぬ
 わたくしの夢物語りを我慢強く聴いてくれる人よこの指とまれ
 きみにとり夢とはと音間うひとに「ワンサイド・ラブのようなるもの」と
 球体の夢かじりつつ幾年を経しゆえどきに消化不良せり
 残生は夢のかけらを散りばめてちりばえ逝くらんあとはただに無

浜谷久子

師

・地

綿密な年表・事典の後世に資する書誌学成して師は逝く

足跡を確かめ追って光当てる浦西和彦の作家年表
 テキストは梶井基次郎「檜櫟」とし若き助教授の声音の静か
 退官の公開講演教授陣も聞き入る「葉山嘉樹の転向」
 動と静師は谷沢永一と浦西和彦学生わられら

谷沢教授の書評の白熱迫真に購入増えゆく難解書籍
 大学との縁の終焉思わせる先生逝去に消える「国文」

待つことの多くなりたる日送りよ前へ前へと一步ふみ出せ

無い子には泣かぬとしきりに言う友の深きかなしみ垣間みており
 講岐の地に住みて七十年今にして何かなつかしきふるさと訛り

野の中を走りて遊びし歎草か巻耳あまた犬のつけこし
 いのちある森羅万象の夢つむぎ生れたる朝の風の何いろ
 旅の芭インデアンの魔除けとう草の実の首飾りわが胸の上
 時くれば約束のことたち上がりさ庭になよなよ花ほとときす

檜垣美保子

音

・昴

朝の日が海にひかりの道を敷きどこにあるかもしけぬ海坂
 薪の東雪にぬれいて火を焚けば煙目に沁むこのなつかしさ
 一階のははの足音ひとりごとくしゃみのふたつ立春の朝
 こきざみに椿の枝のゆれており鶴の去り日白きており
 ひなげしの鉢の六つをならべたるその間隔をははに替めらる
 音すこし近づきふくらみ速ざかる路面電車の旧式車両
 信号を待つ間を共に待つことく路傍に揺るる花きんばうげ

福田庸子

下野河骨

・今

さしのべし手にこたふべく風寄せて下野河骨花ゆらしたり
 丈高き草原となる田の跡の広がりゆきし時の重たく
 刈りあとの色のあはさよひろびると飼料米の田夏日のもとに
 夕映を消しつつくる川の面に大気重たくしづみくるなり
 石積みをかすかに残す山腹に鳥天狗の全たかる像
 本当は働かせ方改革夕暮れに灯らぬ家をふやす政権
 硝子一枚へだてて春の宵浅し今日を生れたる蛾と見つめあふ

藤川和子

紅梅の枝

・眉

仲間よぶ鶴の声が寒空に應ふるものなし寂しきこの世
春光の眩しき朝脱ぎすてしダウンはすなはち鎧のこと
紅梅の枝さし招く庭の内ことしも寿ぐ旧正月元旦
はるあらしつぶてのごとく残花飛び老女のひとみは彷徨はじむ
掌に載するアセビはひいやり垂るるなり友の遺詠を忘ることなし
おばしまに一駆預けぬ黄昏は永くゆつくり余光を失ふ
而して闇けゆく五月さはさはと蛇口の水は梅雨のあめ呼ぶ

藤田美智子

流れのかたち

・新

雪客と名づけられたる鳥のため野は一面に雪を積みゐる
眼鏡の奥の瞳小さくなりゆけり課題出さぬを強く叱れば
卒業証書を受け取らむと立つ女生徒の足首に春の光が及ぶ
どうしても非を認めぬを叱りし日「大人はどうか」と児は問はざりき
一校時二校時といふ区切り方からだより消ゆ 桜満開
チヨーク持つ感触が指に残りをり授業なしるる夢より覚めて
夕間に川面は銀いろ光りつつ空に流れのかたちを示す

藤森巳行

樹木希林

・銀

わが妻が似てゐるといふ樹木希林靈山旅立つ少し悲しい
生きてゐるかぎり女優を演じきり役者魂燃やして逝きなむ
演じきれ我が人生の勝利劇命を懸けて最終章まで
人生はドラマであると言ふけれど俺は未だに大根役者
無器用な生き方晒し演じてる一人芝居の真実一路
闕病も人生劇場一場面演じることは生きることなり
数数の名作残し樹木希林生涯終へる拍手で送らむ

船田清子

稻の香の秋

・天

北よりの脅威にあらず涼風に乗りて來たるは稻の香の秋
ボンネットに黄に光るあり怪しみて仰ぐ軒端に十夜夜の月
一面の冬空の青陽光に乗りてしいんと脳へ注ぐ
遺歌集の選歌なしつつ思ひ出を連れだしたどるふたたびの旅
汝が歌になほも生きる汝がいぶきひたに身に浴びパソコンに向く
日々に藍ふかめゆく日の暮れは「ただいま」と君の声する気配
夜の更けを一声にはかに天降り来るテッペンカケタカ じじまを祓ひ

牧雄彦

存分に

・大

角家のあるじ逝きしは去年の秋いま春の日がしんかんと差す
比治山ゆ見放くる町に春日照る原爆のことなきごとし
七十三年前はすでに昔にて原爆のことなきごとし 今
頂きにヘンリー・ムーアの広場ありブロンズ像は春の日はじく
存分に枝をひろげよ花散りてみどり噴きたる川辺のさくら
兄の臥す病院のめぐりあたらしき命萌え出づみどりふるはせ
櫻の木見るまに繁り下をゆく汝が小さき背を木洩れ日うごく

松浦禎子

声速ざけて

・羊

「宝所在近」無学祖元の伝えたる山門を詳しくぐりぬけたり
房ゆらす白雲木の花期はすぎ面影に紗千子さんのほほえみ浮かぶ
雲水の姿見えずとも聞かれし書院のガラス戸かがやきており
あじさいの額おどろうる坂の道来年の花期をまたこの辺で
登りゆく寺領の山の辺そここに住むひとひそむ世離れをして
鳥の名を教えてくだされし今日のひと又いすこかでと言葉をそえて
人間の声遠ざけて山上に墓しつらえし阿川弘之

松永智子 楠

・嵐

三好聖三 佇む

・伊

来る夏のこの楠大樹の蟬しぐれとともにしきかむ生きるよおとうと
身のうちの染まらむまでに仰ぎたり楠一本の夏終るらし
あをくゆるく煙ながる晩秋の野のありとほしい間にあたらし
呼ばれたことく目ざむるあかとき
蒼くして十七夜の月高くして星ひとつありおとうと逝きぬ
しろき骨箸にひろへばかそかなりおとうとの残す終なるひびき
裸木のひともとありて庭ひろしこぼれしこぼれしこぼれことばいまにただよふ

三浦好博

キープレフト 銚

草に寝て飛行機雲を見上げをり『病牀六尺』のひとの見ざる景
目を合はすことを避けるるやうに見え我も挨拶せずに過ぎたり
「お爺さん、お爺さん席空いたよ」とこちらを見てから俺のことか
右に寄りすぎるは危険私はキープレフトを守り行きます
いつ死んでもいいと言ふ吾は言はれけり「健康番組必ず見るね」
髪を剃る度に鏡の向かうより亡父が見てる六つも越えぬ
隣組の粗野なる女がヘルパーと聞きてホームには入りたくなし

宮本靖彦

老いの世界 凌

探ねゆく歌のまことのほどとはし観よ詠はむか老いの世界を

おとなしきと思ひし友が演壇に謙虚にかかるその道筋を

頭頂に温さおぼゆる午後の日や白木蓮の葉はしばみ初む

台風の風待つしばし庭の草抜けばこぼろき手にころび出づ

割高と思ひし雨戸初秋早や三度の出番風に応ふる

ねつとりと甘きピールの味が欲し端麗すつきり世にはびこりて
ハイボールとしやれし昭和の安酒場今妻ものむソーダ割ウイスキー

夕照に霞のなかを頭つ右舷赤色にして南下するなり
その人は欠け茶碗を中に棲むおもざし声色あわき言の葉

おだやかな会話が世界を広くするようにも思う樹木のふたりに
その人は消え入るよう其處に居るいつもどもそのように居る
鍵置きて煙草を吹かすしばらくはカルフオルニカの咲くところにて
みだれ飛ぶ精靈蜻蛉の下にして唐人豆の株を引き抜く
いのししに止めを刺している画像頭部殴打ののちをすばやく

御代田澄江 母を恋ふる歌

茨

亡き父母の熱き労苦に生き延びし生命ぞ今朝見ぬ恋母の夢

母が居り娘も居りぬ同卓に時空超え飯を分かつ喜び

「山が動いた」言ひしおたかさん懐かしむ野党團結われは望むに
I CANとふ国際NGOがノーベル平和賞感動せるも我が政府はも
浪花にカジノ誰を儲けさすギャンブルの依存者見込み作る診療所
広辞苑買ひてずつしり重たきを頼り生き抜くアラハン時代
東御苑野外セミナー大手門ぐれば樹々の秋色深し

茂木斌

兜太さん

町場にて時速四キロ山道に時速二キロもこのごろ成らず

居酒屋の地酒いろいろ新年にふさはしと選る「庭のうぐいす」

名聲を句界に世間に知らしめて秋待たず逝く兜太さん惜し

山かけの夕暮歌碑も苦むして「出みづかは」なる一首を刻む

電子辞書諸橋漢和を入れて出よ十万円なら躊躇はず買ふ

山清水両手に受けて冷たさを零さじと飲む汗の体に

忘れないやうにメモしてそのメモの行方を捜す悲しからずや

もとむらしげと

希 林

・そ

横 田 敏 子

スローライフ

・福

心をば偽らず生きてそれなりに美しかりし樹木希林逝く

余命をば隠さぬ希林の清しかり歯の無き口を衆目に晒す

飄々と生死の川を渡りゆきぬ現し世の名は希林と言えり

オフィーリア浮かびし川の畔には青い鳥いて希林を見つむ

四十年別れ住みたる夫との電話の別れ言葉出ですとや

無頼なる夫は気丈ならずして希林との別れ受け入れられず

腰を振りジユリーと叫ぶ映像をこころに刻み希林を忘れぬ

八 乙 女 由 朗 朗 詠

・柴

吉 内 尚 彦

自 選

・浜

まばらなる過疎地を行くに精靈の顎ちふさぐあり津波のあとは

東室と言うけだるき職につらなりて青空の下歩を詰めあるく

くもり空に飛翔を見するつばくらめ昭和時代の思いを曝す

阿武急は乗りの思いを果たしたる山本友一が通りし線路

八月は一番重き月にして盆も終戦も一緒に来るなり

暑氣避けてわが家に上りし蛇の子が急ぎ帰りゆく庭の茂みに

振り向けば戦後生まれのアプレ・ゲール白髪にまみれて追い越さんとす

山 下 雅 子 還 曆

・習

吉 永 惟 昭

平成終る

・熊

推敲に耽りて見やる庭の木々剪り込まれたる簡潔の妙

ペランダのジーパン吹かるままおどるわれを離れてこのしなやかさ

とれ立ての筈ごほんに山椒香りでめぐるや五臓六腑を

「つゆ明けが」なつかしき声連れてくる遠雷の音しばらくひびけ

この夏のひぐらしの声聞かぬまま白雲あわき行合の空

歩行者の専用ボタン押せる児の小さき指がバスを止めたり

原子炉の初稼動せしその年に生れし娘の還暦祝う

平成の終りを決めし春を待つ地震の廃墟に路の黄の花

再びは来ぬ平成の戌の年水仙をのみ飾り迎うる

水仙は倒れ伏すとも潔し もたぐ白花土うちに鳴る

教員の異動に探す人もなくたたむ新聞花冷えの朝

世話好きの己があやまち咎む白うつむきて咲く小手毬の花

後十日ボツダム受諾の早ければ……時は戻らぬ風化のすすむ

くそ暑き 首相あいさつ日は外のカンナの花にヒバクシャ妻は

初氷あさの光に反射して閉じ込められし落葉がひかる

冬の陽にまぶしく光る雪の上のわたしの影に両手を振りぬ

三月は「フクシマの月」記憶から永久に消えない福島人われ

少し柔くなりたる桃をそっと剥く ああわたしのようだ夏の夕ぐれ

夕風はかすに秋を匂わせてわたしの庭にとんぼが來てる

くるくると剥きゆく林檎透きとおり蜜のほのかな香り立ちくる

おしなべてスローライフの日々にしてゴールドキウイ卓に熟れゆく

朝井恭子 白粥

・森

市原やよひ

雪

・萬

発熱に籠りいる日の窓鳴らし風は問いかく「だいじょうぶ?」

義妹の送りてくれし白粥のパックに梅干添えてありたる

人々に炊きたる粥の白き湯気おぼおぼかる心を包む

ベランダに舞い込みきたる花びらを拾いひろいて風に返しぬ

古里の友より届きしさくらんばギャマンの鉢透かして紅し

渋谷なるハチ公前の人を待つ景のかわらず昭和も今も

ひと桁の昭和に生れ平成を丸ごと生きて尚も煩う

磯田ひさ子

赤き耳

・森

雨あがる鴨川大山千枚田 雲を映して風を促へて

天からの水の恵みに千枚の田に千枚の顔がうるほふ

さざ波を立てつつ棚田を吹き渡る風に盛りの力あるらむ

風青し見あぐるかなたの揚げひばり一羽か二羽か鳴きごゑの降る

赤き耳ひらく形に落つる花 千枚の井戸のめぐりに椿

こころさし残る椿か花も葉も落ちてなかなか土に還らず

秀吉の顔のやうなる小花つけ横向き向きに咲くえびね蘭

市原志郎

リハビリ

・萬

奥田清和 沙羅の花

・大

いくひらか舞い落ちて来る夜の雪どこかで「鬼は外」の声はしないか

クロッカス咲く玄関にボツツリと日が差しており我が生の如

ようやくに名を呼ばれたる待合室妻のほっとした息が動けり

若葉あふるる古墳群の真中に立ちて居たりき生ありし今

ほくほくと芋を食べおりがさと手を揉みており五月末日

ハビリを終えたる時に音もなく降り来し雨のありたるを知る

鳥一羽辯の上を歩いている我もののように歩いてみたし

電話より合格の声届ききて孫も我らも春が始まる

降り積もる程に雪が消して行く音なき夜を楽しみている

雪深く積もれる夜の月食を一人見ている一人しあらねど

雪残る歩道をよちよち歩く児の解け始めたる雪だるまにも触れ

久久に遠出の夫の車椅子めだかの袋と満面の笑み

ユーチューブじっと見ていし孫のレゴにて作る自動販売機

キラキラと瞳まぶしもレゴに成る自動販売機持ち来し孫の

大浪美雪

道産子馬

・森

クローバーを筆りておれば近寄りく道産子馬はもの言いたげに

クローバーへ首を伸ばして道産子は大山盛を一口に食む

馬の口届くあたりに草はなく硬くしまれる下土黒し

道産子と見つめ合い切り切れながの眼うるみて睫の長し

道産子は天水桶の水が好き 天空のかぜ日の匂いして

何匹もの犬猫のほか精神科の女医は一頭の馬を飼いおり

首筋をたたかれながら飼主によりそ馬のまなこ穩しき

奥田清和 沙羅の花

・大

國破れひそと育てし若楠のいま学窓に命かがやく

コンピューターの世となりたれど浮世絵の弥次喜多の世といづれ優れる

生粹の京の歌人の君なりしよき日よき折よき酒酌めり

いつしかにわれを兄貴と酌み交はす薩摩隼人の厚きてのひら

伏見へと続く街道生家跡立ちてしみじみ風の音きく

遠來の友を迎へて二次会は段位を競ふ橋中の樂

沙羅の花咲きさかりるしく年や垣の白樺冴えさえと照る

奥田陽子 花吹雪

・羊

香川進の生きものの歌 2 田土成彦

・卵生みし闘声はかなしきくだかけの二つの支流を越えてきこゆる

『甲虫村落』より

かなしみの糸吐く虫というもあらん露ふくむ子の声のきれぎれ
やさしき味好める子なり冬瓜の片隅にして売らるるを見
絵身にさくら花びら浴びて立つちいさき者は遠きより見ん
樹の中はひやり冷たしおぐらくてただ鳥の声降りくるばかり
雨過ぎて草の明るさむせかえる緑のなかを死者に近づく
株価さえ下がらねば良きと誰が言いしにこれる雨に濡れて帰りぬ
ゆらゆらと青葉の光にひたりつつ放射線量聞きていたりぬ

小野雅子 木々 羊

樹のみどりふかき底ひに一筋のひかりとなりて水ながれる
夕暮れに帰りきたれば手花火の匂ひ流れ来ひとかけのなく
「七軒家」「二軒家」そして「三軒家」バス停の名は昔を伝ふ
知らぬ間に路を濡らして畠にかそけき音をさせて雨降る

祖母に見せてあげたしと見るふるさとの不味公の茶器のさまざま

切り方のちがひを言ひて豆腐汁うけつがれゆく家族のしるし

久我田鶴子 祈りのとき 羊

忘れ得ぬ記憶に黙すひとのるて海鳴りを聞くひととき貝殻
滝のうへに今しかかる太陽がまとふ虹の輪たれぞ見しむる
「海ゆかば」ながるる日々を育ちきて谷川俊太郎その詩の明度
原爆画展展示会場より逃げだし「あなた」とはわたし友の語りに
電力や雲をあやつるリスク知りブドリは行けり火山の島へ
そきゆきて自然に還るときの間をもてる幸ひもてる寂しさ
ゆふぞらに纖月と星はじめりのひかりひきあひそれには在る

「六つの河」のドナウよりひいた。「くだかけ」は辞書には「くたかけ」と濁点のない方で記載されている。いくらかさげすんだ表現となるが、ただの鶏と言うよりは迫力のある言葉だと思う。私の子供の頃の家の庭には数羽の鶏がおり、時おりはその世話の一端も手伝った。卵を生んだあととの不意の闇の声にびっくりしたこともある。

この歌は海外詠と言つても当時は滅多に一般人の入ることの出来なかつたソ連圏への経済視察団の一員として行かれた時の作品だ。下句の空間把握の凄さはどうなんだろう。ドナウの支流と言つても実際の位置は解らないが、荒漠とした地平を「二つの支流」が流れていて、目の前の川のもう一つ向こうの川の対岸から聞こえる鶏の鳴き声だ。鶏は一日のうちに何時卵を生むのかは決まってはいないが、何となく早朝の生活音がまだ顕著に立たない時間帯のように思う。この歌の生まれた時期は鶏も日常生活の一部として身近な存在だったようと思う。それだけ思わぬ旅の一駄に聞こえてきた鳴き声は郷愁を呼び起こそのに十分だったのだろう。三句目の「かなしき」は感傷性の豊かな作者の思わず漏らしてしまった心情だろう。総じて場の空気感とでもいうものを見事に捉え得た作者壯年期の代表作だと私は思っている。

庭木を剪らむ

芦田 房子

一首を詠して

今月の二人

南天の蜘蛛の巣払い払いいつつ茂り過ぎたる枝切りてゆく
付き纏う蜂の羽音を恐れつつ剪定の手を急がせてゆく
眼に沁みる汗に耐え得ず袖に拭い剪定鉄は熱き膝に置く

下腹に沁み透りゆく水飲みて茂る庭木の高さに挑む
三日経て起こりし腰痛耐えがたく庭木は要らぬとぼやきつつ寝る

結婚記念日に夫と植えたる卯の花の今日か盛れどその夫は亡し
嫁ぐ娘の植え行きし牡丹五つ咲き退職迫るを今日告げて来ぬ

来年の豪華な花を期待してまだ色褪せぬ牡丹摘み取る

亡き母と購めしラベンダー薫るなりリースに撓めて玄関に釣る
玄関に挿すラベンダー「いいわね」と暮れて戻りし娘がつぶやけり
蟠梅が今年あまたの実を持ちぬ良きこと起る前兆であれ

二種類の八重椿とて植えたるに同じ色なる山椿咲く

柏葉の紫陽花今か盛れどもいじめのごとく蔓草からむ

六十五歳で夫が他界のあと、体調をくずし、しばらく入退院を繰り返しました。

家族に心配をかけ、亡き夫にも申し訳ないと思いつつ、先の見えない間の中を歩いているよう二年間が続きました。

やがて、このままでは生きている甲斐がないと悟り、新聞で見た知人の歌がきっかけで、短歌に魅力を感じ、「地中海」に入れてもらいました。

しかし、作歌のルールも感動の捉え方も全く無知な私は、何をどう詠んでよいか解らず、何度も何度も挫けそうになりながら支社長の指導と、歌友の励ましを受けて何とか続けてきました。

この頃、日本語には五音または七音になりやすい性質があること、声に出して読んでみれば、句切れ以外にもさまざまナリズムがあること、歌とは原則、その瞬間の感動を詠むものであることなど、少しづつ解りかけようとしています。

遅いスタートで、短歌を始めてまだ三年ですが、気付けば念頭に短歌があり、短歌に対することが、楽しくなりつつあります。今日も日記に一首を詠して頑張ります。

今月の二人

防人にあらねど

神戸 良三

ひとり暮らし

下総の職場閉じられ術の無き我ら流浪の民となりしや
新鋭ともてはやされし日は遠く黒く静まる工場哀れ
若き人拳りて去れど敗残の老兵共は何処に行くや
防人に非ねど我は家離れ和泉に行きて職を繋げん

「すぐ戻る」妻より我を宥めつつ霜月末の下総を発つ
下総に妻を残して独り住む和泉の郷の朝は暗かり

塩味と油脂をひかえし我の膳美味くなけれど黙して食す
滞ることの常なる我が仕事寮に帰れど愚痴る者なし

何時よりか歌を詠みたき心湧く独り離れて暮らす想いを
新婚は遠き日なれど指折りて妻の来る日を心待ちせり

峠越え妻と旅する紀の国は如月にして梅の香に満つ

飛鳥寺の裏手に立ちて明日香野の夕に浸りし職離れたる日
佐保姫は我の労苦をねぎらうやこの明日香野に映える陽光は

平成十三年十一月下旬私は大阪府貝塚市の工場に単身で転勤することとなった。還暦を翌年八月に控えて勤務していた千葉工場が閉鎖されて大阪に集約することになったためである。当初の予定では数ヶ月で会社を辞して戻ろうと考えていたのだが、次々と面倒な課題を与えられ、仕事好きもあって三年四ヶ月の滞在となってしまった。

千葉県市川市に家を持っていたので、妻を残しての単身赴任となつた。夫婦二人の生活を続けてきた私達が離れて暮らすのは寂しく、殊に赴任当初は日の出の遅い関西の朝が一層暗く感じられた。しかしごくそのような環境の変化にも慣れて豊富な食材の中で自炊し、また妻が来阪した折には積極的に紀伊半島や奈良を巡った。これまでに経験したことの無かった生活や歴史豊かな関西の史跡に触れるこことによってこの頃から短歌を詠んでみたい気持が湧き出しそうだった。

平成十七年三月三十一日の退職の日、宿舎を払つた私は奈良の明日香に宿を取つた。夕暮れ近くに妻と明日香野を散策した。うららかな日射しはあるで春の女神が「ご苦労だったね」とささやいてくれたように思えた。

良きこと起こる前兆

歌を詠みたき心湧く

評者・久我田鶴子

芦田さんは、岡山県津市在住。庭木の手入れに余念がないようだ。暑さの中でも、自ら剪定鉄をふるつて、南天の蜘蛛の巣払い払いつ茂り過ぎた枝切りてゆく。

南天の茂り過ぎた枝の剪定に、蜘蛛の巣は厄介だ。「払い払いつつ」に、その厄介さがよく表されている。

眼に沁みる汗に耐え得ず袖に払い払い袖に置く

剪定作業に噴き出してきた汗が目に沁みる。汗を「袖に払い」、剪定鉄は「熱き膝」に置く。この具体的な描写によって、読者にもその日の作業がリアルに体感されてくる。

下腹に沁み透りゆく水飲みて茂る庭木の高さに挑む

この歌も実感がよく出ている。喉を通った水は「下腹に沁み透りゆく」のであり、作者が挑もうとしているのは「茂る庭木の高さ」なのである。殊に、「下腹に」「高さ」という言葉の選び方が、作品のリアルさに繋がっている。

玄関に挿すラベンダー「いいわね」と暮れて戻りし娘がつぶやけり

一日の終わり、戻って来た娘が玄関に飾ったラベンダーに気づいて「いいわね」と呟いたという。そのラベンダーは亡き母との思い出にも繋がるようだが、ここでは、母と娘のほつとするような時間が静かに流れている。

・蠟梅が今年あまたの実を持ちぬ良きこと起こる前兆であれ例年になくたくさんの実を受けた蠟梅。これは何か良いことがあるのかもしれない、良いことが起こる前兆であってほしい、と歌は祈りに繋がってゆく。

神戸さんは、現在は信州上田にお住まいだが、以前は千葉県の市川に住み、大阪に単身赴任したことがあったようだ。下総の職場閉じられ術の無き我ら流浪の民となりしや勤めていた千葉工場の閉鎖により途方に暮れた様子が詠われている。行き場の無い自分たちを「流浪の民」といったところに、作者の年齢を想像させるものがある。

・防人に非ねど私は家離れ和泉に行きて職を繋げん

千葉から大阪への単身赴任。下総から和泉へ、妻を残して行くのである。その自らを「防人」のようを感じている作者がいる。頭の中には万葉集の東歌が浮かんでいたことだろう。

・すぐ戻る妻より我を宥めつつ霜月末の下総を去る

下総を去る日の歌である。「すぐ戻る」と言いながら、それは妻よりも自分自身を宥めるものであったと、自らを客観視している。調べが張っていて、いかにも防人の風格である。

・何時よりか歌を詠みたき心湧く独り離れて暮らす想いを

赴任先での味気ない食事。滞りがちな仕事。帰っても恩痴を言う相手さえいない暮らし。妻の来る日を心待ちにする日々。妻が来た折には紀伊半島や奈良を巡り、そうした中から、歌を詠みみたい心が湧いてきたのだという。快哉!

・佐保姫は我的勞苦をねぎらつやこの明日香野に映える陽光は退職後の歌だ。春の光にかがやく明日香野を歩く。まるで佐保姫が苦労をねぎらつてくれるかのようだ、と。この日も妻が傍らにいた。佐保姫は春を司る女神だが、妻のこともそこ重ねているように思われる。